

シンポジウム II：医学教育学会共催シンポジウム

1. 司会のことば

齋 藤 邦 明*

大学の教育改革は医療職を含めて多方面から検討され、近年では教員から受動的に知識を得る教育から、学生自らが課題を見つけ必要な知識を探してそれらを解決するアクティブラーニングが着目されている。医学や薬学教育では、すでに多くの大学がこの手法を取り入れており、その 1 つに Problem-based Learning (PBL) がある。これは知識を実務に生かして、チームで課題解決に取り組む実践的プログラムである。学生のモチベーションを高め、チームワークで成果を挙げる重要性を効果的に学習できるカリキュラムとなっている。

日本医学教育学会では長年にわたり、医学の教育手法について様々な角度から議論がなされており、我々臨床検査技師養成に携わる教員が学ぶべきことは多くある。今回は日本医学教育学会から大槻眞嗣教授をお招きして、藤田医科大学で行っている「ふじた式 PBL」について紹介していただいた。実際の手法を学会参加者に経験してもらうために、藤田医科大学の関係スタッフと、北海道大学保健科学研究所の学生さんの協力を得て、会場から参加を募り一部のプログラムを体験してもらった。一人のチューターがモニター室から授業の進行を観察し、複数のグループの学習を支援するふじた式の特色を、多くの方に理解していただけたのではないかと思う。教員不足が課題の臨床検査技師養成施設

も多いので、紹介いただいた今回の方法をアレンジすることは臨床検査学教育へ PBL を導入する際の大きなヒントになるだろう。

将来的には日本医学教育学会と連携し、今回の取り組みをはじめ、すでに医学教育学会で導入されている優れた教育システムを、臨床検査技師教育に応用することが重要と考える。

講演及び実演いただいた先生方ならびに学生諸氏、当日ご参加くださった多くの皆様には心より感謝の意を表したい。

文 献

- 1) 大槻眞嗣, その他. チューターをモニター室から支援する「ふじた式 PBL」の確率. 医学教育 2011; 42(3): 135-40.

*藤田医科大学大学院医療科学専攻 saitok@fujita-hu.ac.jp